

5. 石川県能登町・輪島市からの実践報告

(1)能登町立小木中学校の取組

廣澤 孝俊 （能登町立小木中学校 教諭）

- 1.小木中学校では、「津波が来ても小木の町から一人の犠牲者を出さない」ために、地域に呼びかけてさまざまな取組をしています。平成 23 年から今年 11 月までの活動の様子をお伝えします。全校生徒 53 名ですが、大体 7 割が湾のまわりに住んでいる状況です。
- 3.3 月 11 日。東日本大震災が起きました。津波で大きな被害を受けた三陸海岸と同じリアス海岸の小木地区に住む生徒たちは、すぐに募金活動を始め、これ以外に自分たちにも何かできることはないか考えました。そんな中、ある生徒がつぶやいた「小木に津波が来たらどうなるんだろう」という言葉から、この活動は始まっています。そしてこの活動の合言葉が「小木の町から一人の犠牲者も出さない」となったのです。
- 4.活動の初年度である平成 23 年は 2 つのことを目標に活動することにしました。1 つは、「小木地区全体を対象とした津波避難訓練をやりたい」ということ、もう 1 つは「もし避難所になったらどうすればよいのか知ること」です。港町なのに避難訓練を一度もやったことのない地域でした。自主防災組織も何もありません。
- 5.目標は決まったものの、活動をどのように始めればいいのかまったく見通しが持てませんでした。ゴールは見えないけれど、できることからやってみようということで、完全な見切り発車でした。まず、生徒が津波避難についてどれくらいの情報を持っているか調査することにしました。① ②ともに誰も知りませんでした。
- 6.そこで、私たちは、まずハザードマップづくりからスタートしました。海拔 10m ごとの等高線にラインを引き、自分たちの家が建っている場所を確認しました。そして、自分の家から避難場所である中学校まで何分かかかるか記入しました。
- 8.家庭用ハザードマップも作り、小木地区全家庭へ配布しました。
- 9.次は避難経路の確認です。経路の危険箇所を調べ、避難経路図を作りました。ところが、これを作った生徒が「お



3月11日……。

自分たちにできることはないか……。

↓
小木に津波が来たらどうなる？

↓
犠牲者を一人も出さない地域づくりをしよう

平成23年度(初年度)の目標

- ① 小木地区全体の避難訓練をやりたい
- ② 学校が避難所になった時どうすればよいか知りたい

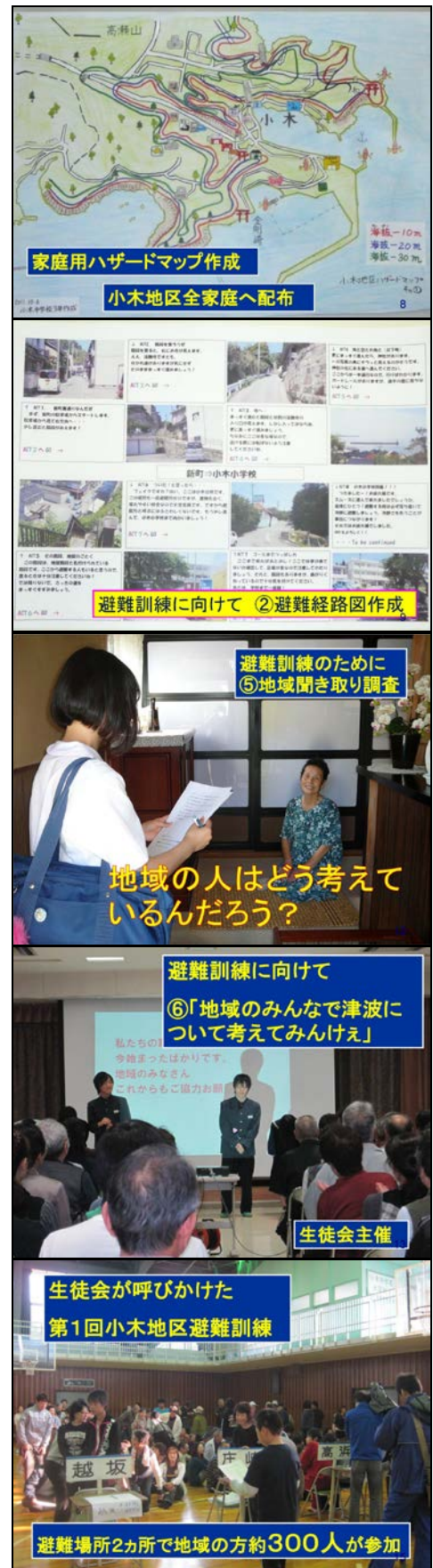
① 自分の家が海拔何mの所に建っているか知っていますか？

② 津波警報が出たとき、どこに避難すればいいか知っていますか？



年寄りや子どもには見にくい」と発言しました。そこで、避難経路の DVD を作ろうということになったのです。

- 11.避難の目安になれば、ということで、海拔表示板を技術の時間に作り、地域の避難経路に設置しました。
- 12.中学生は少しずつ学習を進めているので、津波についていろいろなことがわかり始めました。でも、肝心の地域の人たちはどう思っているのか、ということが気になり始めました。そこで、津波についてどのようなことが不安か聞き取り調査をしました。学校に帰ってきた生徒たちは「先生、地域の人たちの考え、甘すぎる!」と言い、絶対津波避難訓練が必要だという意識がさらに高まりました。ますますこの活動の意味をわかっていったようです。
- 13.たくさんの人たちに避難訓練に参加してもらうために、地域の人たちが知りたいことをまとめ、自分たちの活動の報告とあわせて地域の皆さんと津波について考える会を生徒会主催で行いました。その会には 110 名の方が参加してくださいました。
- 15.いろいろな取組の甲斐あって、小木地区の第 1 回避難訓練には 300 名の方が参加して下さいました。
- 16.もう一つの目標「もし避難所になったら何ができるか」についてテント設営や炊き出しの訓練もしました。
- 18.PTA 主催段ボールでの間仕切り練習です。これは、「中学生がいろいろやっとなのに、PTA がなんもせんわけにいかん。なんかすることないですか」という PTA 会長さんのお話から実現しました。
- 20.1 年目の活動をはじめた際の大きな課題は、「こんな活動が地域のために本当に必要なのか」という思いを持っている生徒が多くいることでした。そこで、地域のために始めたことなので、活動の中心は学校ではなく「地域に出て行って行う」ことにしました。そして、地域の人たちの言葉や思いを聞きながら活動を進めていったのです。地域の方からは、「小木のためにありがとう」という感謝の言葉や「がんばってね」という応援の言葉をかけられ、それによって生徒のモチベーションはかなり高まりました。
- 21.2 年目、平成 24 年度の活動です。避難訓練には 300 名の方が参加して下さいましたが、それは小木地区の 7 分の 1 にしかありません。そこで、活動の目標を「避難訓練でもっとたくさんの人に参加してもらう」ことにしました。そしてもう 1 つは、もし学校が避難所になったら「自分自身



はどう動けばいいか考える」ことにしました。

22.まず、参加者を増やすためにはどうしたらいいか考えました。「日中でも地域にいる人はだれか？」すぐに「お年寄り」と生徒から出ました。そして保育園児。保育園児には、必ず保護者がついてきます。そこで、お年寄りと保育園との交流を始めました。

23.交流の最後には防災活動を入れます。自分の家を探してシールをはっているところです。

24.お年寄りとグランドゴルフでの交流も始めました。

25.活動の最後に、聞き取り調査や避難訓練への参加のお願いをします。

26.小学校へも行き、自分たちが調べた津波のことを分かりやすく説明しました。

27.これらの活動は、交流をしたいろいろな人たちが、「仲よくなった中学生がなんかやっとするし、自分たちも協力するか」という思いを持ってもらうために行いました。

28.同じ能登町内にある山間部の柳田中学校と里山里海交流も始めました。この活動の意義は2つあります。ひとつは、どちらかが被災したときに互いに助け合う共助の思いを育てることです。もうひとつは、将来どのような地域で生活することになっても安全で安心な生活が送れる知識を身につけさせたいということです。

29.小木の祭りに柳田中の生徒を招待しました。小木の里海のことを知ってもらう活動です。

30.柳田にある鉢伏山に柳田中の生徒と一緒に登り、ブナの森を散策しました。柳田の里山を学ぶ活動です。

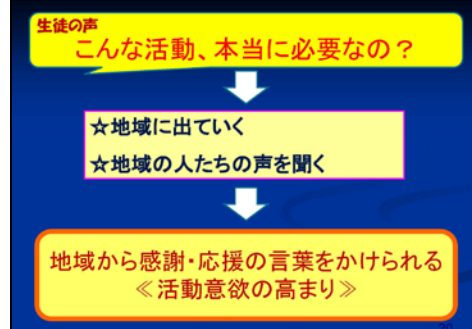
32.これらの里山里海交流会で交流が深まり、小木地区津波避難訓練では柳田中学校から炊き出しおにぎりの差し入れが始まりました。

33.平成24年10月13日に行われた第2回小木地区津波避難訓練の様子です。

34.お助け隊といって、地域から要請があったおうちへ生徒が向かい、一緒に避難するというものです。この方は、前の年に参加したかったけれど、足が不自由で参加できなかったそうです。お助け隊の存在を知って、学校に連絡してくださいました。参加できたということで、大変喜んでおられました。

35.第2回は850名の参加がありました。

36.第2回の訓練では、海上保安庁のヘリから降ろされた物



平成24年度(2年目)の目標

①避難訓練でもっとたくさんの
の人に参加してもらいたい

②避難所になったとき自分は
どう動けばよいか考える



資の運搬訓練、負傷者のヘリへの搬送訓練も行いました。

37.中学生は、自分たちにできる仕事を探しながら活動していました。

40.2年目になり、活動のマンネリ化が課題となりました。そこで、活動の対象を保育園児、高齢者、他地区の中学校に絞り交流を深めていきました。交流が深まるにつれ、多くの生徒は自分たちの行っている活動の大切さに気付いていきました。また、様々な外部機関と連携して活動を行うことにより、学校の負担が少ない中で充実した活動を行うことができました。これによって、生徒は大きな充実感を味わうことができました。

41.3年目の活動です。3年目になる平成25年度は、次の2つのことを目標に活動することにしました。1つは、「防災と減災のために何ができるか考える」、もう1つは「防災・減災の大切さを地域の人たちに伝える」です。

42.被災したとき、身近にあるもので応急手当をするにはどうしたらよいか学びました。

43.どこにでもあるレジ袋、ストッキングも活用できます。生徒たちは感心していました。

44.先生たちも研修を重ねています。もし学校が避難所になったら、活動の中心となるのは先生たちです。その時どう動けばよいか、どう判断すればよいか、このゲームで学びました。

46.保育園児には、津波避難の3原則の劇を作り、防災の歌と踊りで津波防災に大切なことを伝えました。

49.生徒が作詞作曲した防災の歌です。

51.こうして迎えた第3回小木地区避難訓練の様子です。中学生は、いろいろな講習会で学んだことを今度は小学生に教えます。

52.第3回の津波避難訓練には500名の参加がありました。

53.避難訓練の中で、先ほど説明しました里山里海交流をしている山間部の柳田中学校から炊き出しおにぎりの差し入れがありました。

55.3年目になり、社会も地域も津波防災への意識が薄らいできました。そんな中、自分たちが学んだことを他の人に伝え、たくさんの人たちに発信する活動に取り組んでいきました。この活動は、津波防災の様々な知識や力がないとできないものです。しかし、生徒たちは自分たちが身につけているその力を、当たり前ものと思っています。その大



小木が被災したら柳田の人が助けてくれる！柳田でなんかあったら小木で助ける！

里山里海交流会



生徒の声

こんな活動しなくても大丈夫じゃないの？

★地域のいろいろな人たちと交流する
★他地域の中学生と交流する
★さまざまな外部組織と連携する

自分たちの活動の大切さに気付く(理解する)
多種多様かつ充実した活動を行うことができる

平成25年度(3年目)の目標

- ①防災と減災のために何ができるか考える
- ②防災・減災の大切さを地域の人たちに伝える

切さに気付かせることが教師側の大切な働きかけでした。

- 56.平成 26 年度は、津波防災の活動を始めて 4 年目になります。そこで、第 1 の目標を「防災と減災のために自分たちができることのレベルアップ」としました。中学校で活動を進めてきた中学生と、その中学生にいろいろなことを学んできた小学生。その子供たちが一緒に活動をしなが、自分たちの知識や行動力をレベルアップしようということです。そしてもう 1 つは地域だけでなくもっとたくさんの人に「防災活動の大切さをつたえる」こととしました。
- 57.レベルアップをするためには、自分たちが学んできたことを新入生に伝えることが大切です。そこで、全校で、1.2.3 年生が各グループに所属する縦割り班をつくり、活動後に意見交換を行っています。
- 58.避難訓練後、「学校が避難所になったら自分たちにまずできることは何か」意見交換したものです。
- 59.1.2 年生が気付かないようなことが 3 年生から出てきました。
- 63.「段ボールトイレ」です。この班は、広い体育館の中で、最初からここにトイレを設置しようという計画でした。後ろにある肋木（ろくぼく）を手すりとして使うそうです。安全・安心について考えることは、福祉について考えることにもつながっています。
- 73.防災カルタは、小さな子どもたちが遊びながら防災で大切なことを身に付けてほしいという思いで作りました。では、お年寄りには何かできないか、ということで、防災の歌と健康体操をコラボさせることはできないか考えました。子どもたちずらずらと作っていました。
- 74.このほかにも、避難する高齢者の気持ちに寄り添うことを目指して、全校生徒で高齢者疑似体験セットを着用しての避難訓練を行いました。
- 75.また、2 年生が初めて、修学旅行で被災地現地学習を行いました。
- 76.修学旅行中、石巻市立湊中学校の生徒会の皆さんと交流も行いました。すごく大変だった被災当時の様子を、明るく話す生徒の皆さんに、心の強さを感じるとともに、自分たちの津波防災活動の重要性を再認識することが出来た活動でした。
- 77.そして迎えた第 4 回小木地区津波防災訓練。今年は 650 名の方の参加がありました。ここで防災の体操を披露しま



ぼうさいの歌

- 1 地震だ 地震 頭を守れ
ゆれが止まったら まわりを見てね
- 2 ガラスやかぺに 気をつけてね
みんな元気か 声をかけよう
- 3 津波がくると 大変だから
避難場所目指して はやく逃げろ

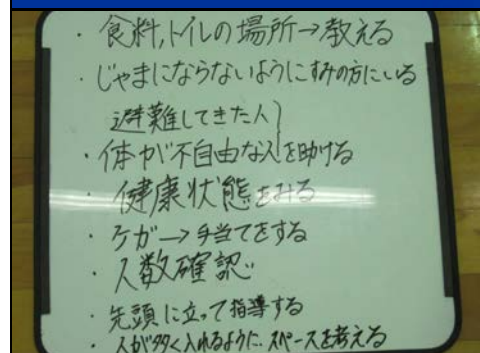
生徒の声
いつまで津波防災のことをやるの？

- ★自分たちが学んだことを伝える。
- ★自分たちが学んだことを発信する。

災害時に自分の役割を判断し行動できる力が
身に付いていることに気付く←当たり前のこと
と思っているので、大切さに気付かせる

平成26年度(4年目)の目標

- ①防災と減災のために
自分たちができることの
レベルアップ
- ②防災活動の大切さを
たくさんの人たちに伝える



した。

79.東日本大震災から4年がたちました。新入生から「小木中はどうして津波防災活動を一生懸命行っているんですか」という質問が出たのです。2・3年生が自分たちの学んだことを1年生にしっかりと伝えていくことの必要性を感じました。そして、新しいことを始めるのではなく、もう一度スタートに戻って初めからやってみることが可能だということにも気づきました。つまり、3年間で防災活動のサイクルが出来上がっており、それを活用するということです。今年の1年生は、原点に戻って1年目に行った活動から始めています。

80.4年間の成果についてお話しします。小木中では、「地域を守るための活動」に取り組んできました。そして、その活動は、「自分たちが安全で安心な生活を送るときに心がけなければならないこと、行動しなければならないこと」への学びにつながっていきました。また、このように生徒が主体的な活動を行う中で、新たな気づきや発想が言葉や行動として表れ、次の学習や活動につなげることができました。これらの活動は、生徒から保護者へ、地域のさまざまな団体、他地域の協力へとつながりました。また、小木中が中心となって行っていた津波避難訓練は、少しずつ小木地区自主防災組織に任せる部分が多くなり、本当の意味での地域の活動になりつつあります。

81.また、この4年間での学校の変化ですが、生徒は自己有用感、自己肯定感が高まり、いじめがほとんどなくなりました。また、地域の様々な人たちとの交流により、コミュニケーション能力が高まりました。そして、学力の向上につながっていると思いますし、実感しています。学力は確実に向上しているのですが、防災教育とのつながりを数値で表すことができないのが残念です。教職員は津波防災教育という教科書がない活動に取り組むことによって、なかなか方向性がそろわないベクトルがそろい、新しい活力が生まれています。また、防災教育をしているのだけど、人権教育にもつながっていた、防災教育をしているのだけど福祉教育にもつながっていたというように少しずつ広がりを感じ始めています。

82.私たちの取組はまだ始まったばかりですが、この取組が「小木中学校の伝統」にそして「地域の文化」になるようこれからもがんばっていきます。

